



児童が育つ学習評価のあり方の実践的検討 ー附属池田小学校における形成的評価改善の取り組みー

【研究目的】

本研究は、児童の自己評価能力を育てる教育評価のあり方について、どのような方法が可能であるのかを実践的に明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

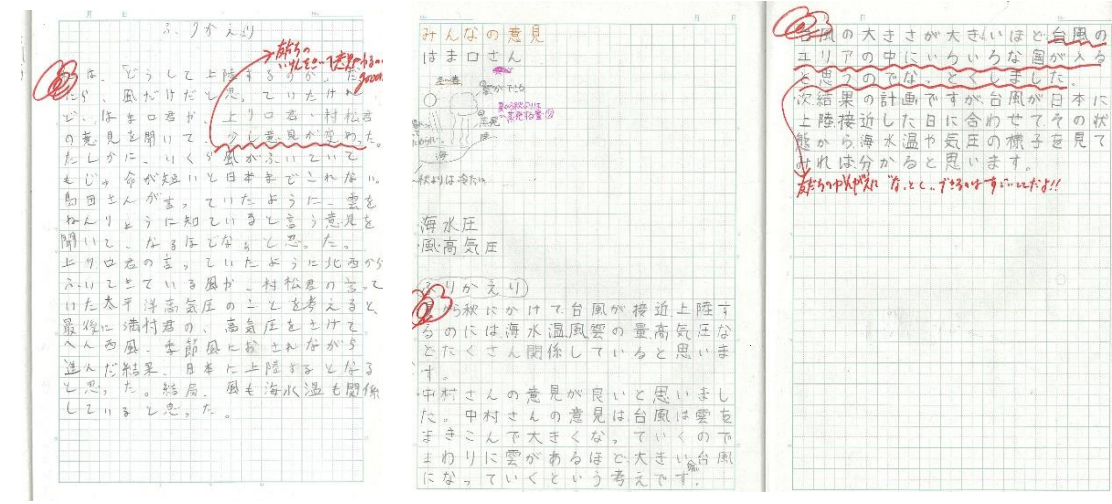
研究者（森本）と附属池田小学校教員とが共同し、アクションリサーチの手法を用いて実施した。研究授業を主たる対象として、授業の中で「自己評価」をキーワードとして、どのような工夫が行えるかを検討した。検討対象となる授業はそれぞれに学年や教科、担当する教員が異なる。以下は、それぞれの教室において取り組まれた事例である。

【附属池田小学校の実践事例】

5年生 理科「台風と防災」
子供の評価・授業者の評価
池住 祐亮

○授業中の子供の発言を見取り・価値づけ
授業のねらいを明確にして子供たちの発言・反応等で全体に共有すべきことを受けとめていった。また価値づけすることで子供たちに返していき、みんなで話し合うことで思考を深めたり広げたりしていった。

○ふりかえり
新しく学んだことや、友達の見解で深まったと思うことをふりかえりに書くようにした。友達の名前を出しながらふりかえりを書くことは、その意見に寄り添いながら合理的な見方・考え方が働く場面であると考える。そこでは子供が自分自身で学んだことの自覚化が行われている。



○ふりかえりを次の学びに生かす
本単元の本質的な問いは「台風から身を守るにはどうすればよいか」である。理科の学びが単元終末の防災教育へとつながるように、子供たちの知識の定着を単元を通してとっていった。本単元の終末には子供たちが学んだことを生かして自分たちの住んでいる町に上陸する台風を予想する学びを展開した。

単元	学 習 目 的	評価の観点
1	台風がなぜ発生するのかを理解し、その仕組みを説明することができる。	知識・理解
2	台風がもたらす被害や危険を理解し、安全な行動をとることができる。	態度・技能
3	過去の台風被害や防災対策について調べ、防災意識を高めることができる。	探究力
4	自分たち自身の住んでいる町に台風が上陸したらどうするかを考えることができる。	応用力
5	防災に関するニュースや動画を調べ、防災意識を高めることができる。	情報活用能力
6	防災に関する知識や技能を、日常生活や災害時に応用することができる。	実践力
7	防災に関する知識や技能を、地域社会で活かすことができる。	社会性
8	防災に関する知識や技能を、将来の防災活動に応用することができる。	持続的発展能力

友達の名前を入れながら、自分の考えと比較しながらふりかえりを書くようにした。学びをふりかえり次へつなげていこうと子供たちがしている時こそが、自己評価している瞬間だと考える。

単元の学びをおえた子供の具体的なイメージを教師がもちこころを心掛けた。毎時間の学びでは「予想される子供の姿」と「実際の子供の姿」を比較することで単元構成を再考しながら授業をおこなった。

4年生 道徳
子供の姿を見取り授業改善を図る
大貫 翔貴

〈本実践における評価とは〉
道徳科の「評価」となると、学習指導要領に「年間や学期にわたって児童がどれだけ成長したかという視点を大切にすると」に記載されているように、中長期的に見取り、評価するものである。しかし、ここで語る「評価の在り方」とは、1時間単位、数時間単位で子供の姿を見取り、子供の学びに返して、授業改善につながる評価とする。

〈何を見取り・どのように返していくのか〉

まず、子供の姿は教材との出会いの場で見取る。子供たちには教材を読む視点として共感・批判・疑問の3観点を提示している。3つの観点を提示することで、教材で描かれている事象に対して自らの価値観で語る姿が見られる。つまり個々の事象に対する見方・考え方が表出するのである。この個々の捉え方を授業の中で取り上げたり、議論させたりすることで目の前の子供たちの実態にあった道徳的な学びへとつながると考える。具体的には、以下の通りである。

教材名：ヒキガエルとロボ
内容項目：生命の尊さ

〈ヒキガエルの命を大切にしない姿に対する批判的視点をもつという事象を批判的に捉える姿から道徳性の高さを見取ることができた。しかし、事象の原因となっている人間の弱さまで捉えることができていないと感じた。〉

子供們的な姿をもとに見取

〈問い返すことで学びを深める〉
「どうしてこんなことをしてしまったんだろう？」
と問い返すことで、自分の都合で命を傷つけてしまっている人間の弱さに気づき、人間理解へとつながる。

このように、子供がもつ価値観をもとに授業展開することで、子供の実態に即した学習を行うことができると考える。また、参加する側の子供にとっても「今自分が考えたいこと・今自分に足りないことから生まれる気づき」に出会うことができる。評価は、教師側が見取り、結果として(教師のコメントや通知など)子供に返すことができる。しかし、評価した結果をもとに、さらに学びを深めていくことができれば授業改善へと大きくつながると言える。

4年生 理科「電流の働き」
～「かかわり」を大切にしながら学びと評価～
工藤 健司

1. 自己評価能力を育成するための「かかわり」

大関は、「教育は教師による一方的な知識・技能の伝達ばかりでなく、様々な人や物との相互作用から成り立つ。」と述べている。子どもが自分自身の学びをふりかえるときには、様々な人や物と「かかわり」あう中で見えてきた世界や身につけた技能等が必要である。また、設問一応答→評価型会話（IRE構造）からの脱却をめざした授業改善の必要性が叫ばれている。このような教室環境の背景には、子どもの操作可能性が前提とされている。このような教師と子どもとの「かかわり」を転換していくために、教師と子どもが異なる他者（人・物・事）からの言葉を聴く必要がある。本実践では、子どもが自分自身の学びをふりかえり、常に自分自身を変容させていくための「かかわり」に着目し、教育（授業）における評価のあり方について報告する。

2. 対象と指導内容

単元：4年生理科「電流の働き」
対象：大阪教育大学附属池田小学校4年生 32名

3. 本実践における「かかわり」と評価

(1) 物との「かかわり」と評価
子どもの学びの過程において、試行錯誤する時間を確保した。特に、単元のはじめ（事象との出会い）と単元の終末（ものづくり）での試行錯誤を重視した。子どもは物に働きかけ、その応答に向かい合い、自分自身の考えを更新していく。この時の教師の働きかけは極力しないようにした。なぜなら、子どもが試行錯誤する中で、自分の思い通りにいかないこと、物から予想した反応が返ってこないことも子どもにとっての学びだからである。このような物と「かかわり」合う時間を確保し、教師が介入しないことで、子どもたちはじっくりと物と対話する様子が見られた。

(2) 人とのかかわりと評価
前述した物と「かかわり」の中で、子どもたちは、試行錯誤しながら、また実験結果を他の班と比較しながら、友だちとの対話、教師からの価値づけやアドバイスを聞きながら、電池の直列つなぎ・並列つなぎの電流の大きさの違いについての理解を深めていった。そこで得られた実験結果を価値づけ、「クラスの知」として共有することができた。

4. 終わりに

これまでの授業における子どものふりかえりは、学んだ内容に関する記述が目立っていた。しかし、物や人との関わりを重視し、教師が子ども一人ひとりの学びの声を聴き、価値づけることで、考えが更新されたことと記述する子どもが増えた。自己評価能力を育成するには、人や物との「かかわり」を前提とした学びの空間づくりや教師の形成的評価が必要であることが大切である。

【引用・参考文献】
大関達也「対話としての教育」杉尾宏編著『教育コミュニケーション論』「関わり」から教育を問う。北大路書房、2011年、78頁。
田中智志「他者の喪失から感受へー近代の教養装置を超えてー」、『勁草書房、2002

2年生 体育
発達段階に応じたふり返りの仕方の一考察
澤田 崇明

<「絵や図」を用いたふり返り>

体育科学習の教材は、ゲームや技といった運動であり、そこには空間的な広がりがあると考えられる。つまり、言葉で言い表すだけでは表現しきれない学びがある。さらに低学年の発達段階を考えると、文章における表現は拙く、教師としても児童の理解や思考をうまく見取ることが難しいと考える。そこで、学習カード（ふり返り）において、うまくいったと思うプレーや技のコツなどについて「絵や図」を用いて記入してもらって実践してきた。ネット型ゲームにつながる「ハンドホッケー」の実践について紹介する。

<「ハンドホッケー」実践について>

○ゲームの概要
1対1で行う。ボールはバレーボールを使用し、手でボールを打って転がす。転がしたボールが自陣コート後方ラインを通過すれば得点とした。膝より高いボールを無効とした平面的なゲームである。

○授業の様子とふり返り
得点するためにどうすればいいか思考していく中で、「相手の位置を確認し、相手がない方へ返球する」という意見が出た。ふり返りにおいては、それらに加えて「相手手を左右に描きつつ空いてるスペースを作ること」や「どこにボールが来ても対応できるポジション取り」を絵や図で表す児童も見られた。学習を重ねていく中で明らかに明確にして返球する児童の姿が増えた。

<成果と課題>
文章に加えて、絵や図で表現することで、児童は自分の考えが表現しやすくなり、低学年時期においては、有効だと感じた。また、表現することでメタ認知され、動きに生かされたように見受けられた。
一方で、思考ができて必ずしも技能に生かされるとは限らない。そこをきちんと見取り、どのような指導をしていくかが今後の課題だと感じた。

5年生 「子供自身が成長を実感するために」
～学級担任としての強みを生かして教科横断的に～
末廣 彩華

○ふり返りの日常化

4月授業にどのような取り組みのかを子供と共有する時間を設けた。そこからふり返りの大切さについて子供と共に考え、通してこ～
～はじめに共通理解したこと～
・どの授業でもふり返りを書くこと。
・自分が分かったことだけでなく、その時の率直な気持ちも残しておくこと。
・単元の終わりに、今までのふり返りを見返して自分の変容に注目すること。
どの教科でも同じように取り組むことで、ふり返りを書くことが日常化された。しかし…ただ継続するだけでは子供の成長にはつながらない。

○ふり返りの活用【教師の授業改善にも…】

ふり返りを子供に戻す際は＊よかったところに波線をいれてきた。その作業は学習の理解度（つまり進度）が明確になる。子供が自信を持って発表するきっかけとなる。教師と子供双方に良い影響を与えた。また、気持ちが書かれている時には、次時の学習で広めるチャンスとなった。授業の初めに全体共有することで学びの連続性を子供たちが実感することができた。子供が学びの連続性が実感できると、ふり返りは「学びの蓄積」であることに気づくことができた。
＊よかったところ→共通理解したことが書けている

○さいごに
子供自身が成長を実感するために継続することが必要である。また、教科を超えて子供たちが取り組むためには、教職員での情報共有は欠かせない。専科授業においても同様の取り組みが行われることが子供たちの学びを促進している。学級担任として教職員と協働することが子供の成長に繋がることを実感した1年であった。

○ふり返りの深化のために
ふり返りに仲間への問いかけを取り入れる学び方を獲得した子供たち。継続していく中で見えてきたことがある。それは、取り入れる仲間の意見に傾きがあるということ。
①深化のための共通理解
・仲間の考えを聞くときに自分の考えと比較し、分類しながらふり返りを取り入れる人を決める。異なる考えの人に注目すること。
・他教科の学びとの関連について取り入れることができないか検討してみる。
自分のふり返りを立ち止まらずに見返す時間を設定することで、客観的な視点を取り入れるように促してきた。

○子供のふり返り 安全科～夜の安全・安心～

「子供のふり返り」を活用して
単元の終末の振り返り

安全科のふり返り
単元のはじめには、経験的な学習で子どもに「安全・安心」の重要性を伝える。その学習では、子ども自身が「安全・安心」を体験し、その重要性を学ぶ。その学習では、子ども自身が「安全・安心」を体験し、その重要性を学ぶ。その学習では、子ども自身が「安全・安心」を体験し、その重要性を学ぶ。

1年生 国語「どうぶつ 赤ちゃん」
自ら気づき伸びようとする評価の在り方
萩谷 桃子

○何を、どのように見取るのか

教師が見取るべきものは、子供たちの学びの方向性だと考える。子供たちが「なぜだろう?」「どういうこと?」「いや、それは○じゃないかな?」等と、疑問をもったり、分らないことや自分の考えを自覚したりする場面こそ、自ら気づき伸びようとする瞬間だと考える。単元全体や授業の中で、その瞬間が生まれる具体的なイメージを持って、見取るタイミングを明確にしておくことも大切であった。子供たちの気づきと授業のねらいをどう繋ぐかを授業の核として、単元構成や授業展開を考えることで、子供たちが何に気づき、授業を通して、どのような考えに至ったのかという子供たちの学びの方向性を見取ることに繋がった。

○どのように共有するか

とくに1年生は、書くよりも、話す方が自分の考えを表出しやすい子供が多い。ペアでの話し合いや全体交流の場を大切にしたい。子供たちの発言を教師が価値づけし、全体に広げたいことや板書で整理して視覚化することが重要であった。振り返りの記述に関しても、自分の言葉で、具体的に書いている子供を意図的に指名して紹介し、その子が何に注目しているのかを全体に問い返したり、国語的な見方・考え方を働かせていることを評価づけたりすることを大切にしていきたい。

比べるのは難しいなあ。
いや、簡単だよ。同じ言葉の近くに違いがあるよ。
それって、どういうこと?
あれ? 同じ言葉がなくて比べられないよ。
でも読めるってことは、歩けるってことだよ?
同じ言葉じゃなくても、意味が似ている言葉でもいんじゃないかな?

基礎を食べるのは、しまらまと同じだ。
カンガルーの赤ちゃんは袋の真ん中いて、ライオンの赤ちゃんは母さんの口の中に入れて移動していたから、守られているのは同じだ。
カンガルーの赤ちゃんは袋の中いて、ライオンの赤ちゃんは母さんの口の中に入れて移動していたから、守られているのは同じだ。

【子供自身による評価】ふり返りの実質化

児童の自己評価能力を育てるという観点からは、特にふり返りにおける工夫が注目・共有された。ふり返りを実質化するためには、

- (1) 振り返りの時間を十分にとる、
- (2) 授業内で振り返りを共有する、
- (3) 固有有名詞のある振り返りを心がける試みをも、継続的に行う必要がある。

【教師による評価】見取りの具体化

子供が自分の学びを言語化するふり返りが難しい場面は、教師側の働きかけ――特に教師の見取り――がより重要になる。見取りの具体化のためには、

- (1) 本時や単元、学年の終了時点で「子供がどのような力を身につけてほしいか」を明確にする、
- (2) 本時の山場で子供の伸びが顕著な姿や発言を具体的に想定する、
- (3) 顕著な子供の伸びに対して教師が積極的に価値づけを行うことが重要である。

